

## 【論文】

# JSL カリキュラム実践の基礎力養成を考える

## —日本語指導と教科指導を架橋する授業づくりに向けて—

稲葉 みどり

愛知教育大学教育学部

## 要約

JSL カリキュラムは、「日本語の学校での学習活動に参加する力（「学ぶ力」）」の育成をめざした外国人児童生徒のための新しいカリキュラムである。教員をめざす学生等がこれに基づいた授業を実践するには、体系的な教育や研修、実践的な学習が必要である。本稿では、JSL カリキュラムの基本構想（文部科学省，2003c）に基づいた授業を行うのに必要な知識・能力はどのようなものかを考察し、その結果を学部における JSL カリキュラム入門の授業を想定したシラバスとして提示し、その指導の一方法を考案した。シラバスは日本語指導の初級者を対象とした教育内容を選定し、4つの柱を立てて構成した。第一はこれまでの日本語指導のあり方を再考し、その根本的な問題点や課題を探ること、第二は新しい教育理念に基づいた JSL カリキュラムの特色や利点を理解すること、第三は JSL カリキュラムの考え方に沿った授業作りや活動の方法、及び、評価を考えること、第四は JSL カリキュラムの指導理念や評価の方法について、認知能力と言語発達、学習言語と言語習得、外国語教授法等の理論的側面から考察することである。授業は、「考える・気づく・見直す・調べる・分析する・創る・関連づける」等の活動を通じて学べるように考案した。

## キーワード

日本語指導、教科指導、JSL カリキュラム、AU (Activity Unit)、学習言語

## 1. 目的

JSL カリキュラムは、「学校での学習活動に日本語で参加する力（「学ぶ力」）」の育成をめざした外国人児童生徒のための新しいカリキュラムである。教員をめざす学生や現場で日本語指導にあたる教員、支援者等が JSL カリキュラムに基づいた授業を実践するには、体系的な教育や研修、実践的な学習や指導が必要である。本稿では、文部科学省（2003a, b, c）で提示された小学校課程における JSL カリキュラムの基本構想を基に JSL カリキュラムを活用した授業づくりに必要な知識・能力はどのようなものかを考察する。そして、佐藤・齋藤・高木（2005）の提示する教育内容を基盤として、学部における JSL カリキュラム教授法入門の授業を想定したシラバスを作成し、指導の一方法を考案して提示する。

## 2. JSL カリキュラム開発の背景

近年、学校教育の現場には、学習に参加できない子どもたち（多くは外国にルーツをもつ子どもたち）が増加している（文科省，2012）。このような子どもたちは、日常生活では日本語を流暢に操ることができても、学校の授業に参加するとその授業内容の理解は容易ではない。これは日常生活に用いることばだけでは、必ずしも

学校での学習には十分とは言えず、学習に参加するための力、例えば、違いを見つける力、関連づけて見る力などの「学ぶ力」の育成をすることが必要であることを示している。そして、「学ぶ力」を基礎にして、各教科の授業に日本語で参加できる力を育成することが、今日の学校教育の重要な課題の1つとなっている。

文部科学省は平成13年度から日本語指導が必要な外国人児童生徒が学校生活に速やかに適応できるように、「学校教育における JSL カリキュラムの開発に関わる検討会議」を設置し、日本語の初期指導から教科指導につながる段階の JSL カリキュラムの開発を行なった。JSL は、Japanese as a Second Language（第二言語としての日本語）の略である。平成15年7月には小学校編（文部科学省，2005）、平成19年3月には中学校編（文部科学省，2007a, b）として国語科、社会科、数学科、理科、英語科の5教科のカリキュラムを公表した。

## 3. 教員養成の必要性

JSL カリキュラムは、日本語指導と教科指導を統合して学習活動に参加するための力を育むことをめざし、一般の教科や言語（外国語）を個々に教えるのとは異なる特色を持っている。よって、授業を行うには、その背景、

内容、特徴等を理解することが必要である。特に、これまで日本の学校で教えたり、教えられたりした経験をもつ人は少ないと考えられる教育方法であり、しかも、日本の学校教育の現場に立つ教員等は何らかの形でこれらの子どもの支援や指導に携わる可能性があり、体系的な教育や研修、実践的な学習や指導法を身につけることは有用性が高いと思われる。

#### 4. JSLカリキュラムの基本構想

文部科学省(2003c)のJSLカリキュラムの基本構想(以下、基本構想)によれば、JSLカリキュラムは、主に日本語の基礎的な学習(初期指導)が終わって日常的な会話がある程度できるようになった子どもたちを想定している。そして、教科と日本語指導を切り離し、教科で使う語彙・表現だけを取り出して日本語指導の時間に学習するのではなく、日本語指導と教科指導を結び付け、子どもたちにその授業に参加するための力(「学ぶ力」)をつけることを目標としている。

JSLカリキュラムには「トピック型」(文部科学省, 2003d)と「教科志向型」(文部科学, 2003e)の2種類がある。トピック型は、具体物や直接体験という活動を通して、しかも他の子どもとの関わりながら、日本語で学ぶ力を育成することが主目的である。つまり、特定の教科というよりも、各教科に共通の学ぶ力の育成をめざしている。一方、教科志向型は各教科固有の学ぶ力の育成をめざしている。各教科には特有の学び方があり、教科の学習のためにはその学び方を具体物や体験を支えにして習得していく必要がある。よって各教科を学習していく上で必要な活動(例、観察、情報の収集、思考、推測等)を日本語表現と合わせて学習するという考え方に基づいている。

#### 5. 教育内容の考察とシラバス・デザイン

ここでは、日本語指導の初級者が、JSLカリキュラムを活用した授業を実践するのに必要な教育内容を考察し、「JSLカリキュラム入門(仮称)」の教授法の授業シラバス(試案)として提示する。シラバスは、4つの柱を立てて構成している。第一は、従来の日本語指導のあり方を再考し、その根本的な問題点や課題を探ることである。主に「学ぶ力」とは何かを考え、JSLカリキュラム開発の背景を理解する。そして、日本語指導と教科指導の分離や言語習得の前提を見直し、指導の基本的な考え方を理解するのが目標である。

第二は、新しい教育理念に基づいたJSLカリキュラムの特色や利点を理解することである。特に、基底となることばの学習に対する考え方、学習者のレベル、学習活動の形態等を把握する。また、AU(活動単位)とその活用法、「トピック型」「教科志向型」カリキュラムの

特色等に関しても理解を深めるのが目標である。

第三は、JSLカリキュラムの考え方に沿った授業作りや活動の方法、及び、評価を考えることである。目標を設定して授業を構成し、AUを活用して学習活動を組み立て、評価方法を考える力をつけることが目標である。

第四は、JSLカリキュラムの指導理念や授業作り、評価の方法について、認知能力と言語発達、学習言語と言語習得、外国語教授法等の理論的側面から考察することである。以上の内容を15回の授業(試験含む16回)を想定したシラバスを作成した(表1)。シラバスは知識や情報をトップダウンに与えるのではなく、「考える・気づく・見直す・調べる・分析する・創る・関連づける」

表1 「JSLカリキュラム入門」のシラバス

回	a. テーマ	b. キーワード
1	a	日本語で「学ぶ力」とは何かを考える
	b	JSLカリキュラム開発の背景/学ぶ力/ニーズ 教科指導/日本語指導/基本構想/指導理念
2	a	従来の取り組みを再考する
	b	順次型/並行型/補充型/日本語指導先行 取り出し/入り込み/通級/サポート体制
3	a	日本語指導と教科指導の統合を考える
	b	内容と意味の一体化/合科的指導 日本語を使って教科を学ぶ力の育成
4	a	言語習得に関する前提を見直す
	b	語彙力/読解力/リスニング力/作文力 短期集中型学習活動と日本語能力
5	a	JSLカリキュラムの特色を理解する
	b	初期指導/日本語で学習に参加する力の育成 体験型学習/活動単位/ことばと内容の一体化
6	a	ことばと体験の一体化を考える
	b	成長型カリキュラム/個人の特性に対応 具体物/直接体験/学習活動参加力
7	a	AU(Activity Unit)の活用法を学ぶ
	b	AU(活動単位)/AUカード/ツール 活動ベース/参加支援/合科的活動/道工具箱
8	a	トピック型JSLカリキュラムを理解する
	b	「体験→探求→発信」/基本構造/トピック 日本語表現のバリエーション/共有体験
9	a	教科志向型JSLカリキュラムを理解する
	b	教科固有の学びの構造/教科内容を基本構造 ライト教材/内容と日本語の一体型学習
10	a	授業を構成する
	b	実態の把握/トピック・学習内容の選定 学習目標の決定/レディネス/在籍学級の進度
11	a	学習活動を組み立てる
	b	AUの活用/AUの組み立て/表現を促す支援 他者と関わりながら学ぶ/学習の流れ
12	a	評価の方法を考える
	b	形成的評価/評価基準/学習目標の達成度 Can-do-statement/バンドスケール
13	a	認知能力と言語発達の関わりを考える
	b	臨界期仮説/年齢と言語発達/バイリンガル 入国年齢/学習環境/生育環境/母語の影響
14	a	学習言語とは何かを考える
	b	CF/DLS/ALP/学習語彙/学習言語の構成要素 日本語スタンダード/言語の形式と機能
15	a	外国語教授法との関わりを考える
	b	内容重視の指導法/タスク重視の言語教授法 内容言語統合型学習/概念・機能シラバス
16		レポート・期末試験・課題等

等の活動を通じて学べるようにデザインした。

## 6. 各授業の学習目標と指導試案

### 6.1 第1回：日本語で「学ぶ力」とは何かを考える

ここでは、シラバス(表1)に示した各授業(1~12回)<sup>1</sup>の具体的な進め方を考察する。特にJSLカリキュラムはこれまでの外国語教育のカリキュラムとは異なる特徴を有するので、それを理解し、実践するための基礎力をつけるには、カリキュラム開発の背景にあるニーズを十分に把握する必要がある。この授業では知識をトップダウンに与えるのではなく、受講生が考えることを主体とした形で進める。よって、考える手順や手がかりになるようにKEY QUESTION(KQ)を用意した。また、授業は受講生が他の人と意見を交換しながらインタラクティブに学ぶことをめざしている。以下では、各授業の目的(指導目標)とKQを提示し、指導の中心的内容を詳述する。

第1回の授業では、JSLカリキュラムが開発されるに至った経緯と日本語を母語としない子どもたち(外国人児童生徒等)の学校での学習における基本的問題や教育上の課題を把握することが目標である。具体的には、取り出し、入り込み、通級等で日本語指導を受け、日常生活では流暢に日本語を操っている子どもたちでも、学校の授業に参加するとその授業内容が理解できず、学習に参加できない子どもたちが増加している現状に目を向け、その原因について日常生活と学習に用いる言語能力の違い等の観点から考える。以下は、考えるヒントとなる3つの質問(KQ1-1、KQ1-2、KQ1-3)である。

◆次の質問に答えよう。

KQ1-1：日常会話はできても、学習にはついていけないのはどうしてか。その原因は何か。

KQ1-2：日常会話の言語能力と学習に用いる言語能力とは同じか違うか。その根拠は何か。

KQ1-3：学習についていけるようになるには、どのような力を身につければよいのか。

これらのディスカッションを通じて、子どもたちが日本語で学習するには、単に日常的な会話の力ではなく、「学習に参加するための力」、例えば、「違いを見つける力」「関連づけて見る力」などの「学ぶ力」の育成が必要であることを理解する。そして、こうした「学ぶ力」を基礎にして、各教科の授業に日本語で参加できる力を育成することの必要性を認識する。

### 6.2 第2回：従来の取り組みを再考する

これまでの学校における日本語教育(日本語指導)は子どもの生活等のための日本語力の育成には一定の役割

を果たしてきた。しかし、学習にはついていけない子どもの増加を食い止めることはできなかった。そこで、第2回では、このような現状を招いた従来の指導法や教育理念を再考し、その問題点を探る。

教育現場では、一般に取り出しによる日本語指導と所属学級における教科指導の両方が行われる事例が多く見られる。両者の関係をみると、以下のKQ2-1、KQ2-2、KQ2-3に列挙した大きく次の3つのタイプ(「順次型」、「並行型」、「補充型」)に分かれる(文部科学省, 2003a)。まずこれらの形態の指導法の特徴を考える。

◆次の3つの指導の方法に共通する特徴は何か。

KQ2-1：日常会話ができるようになるとすぐに教科の学習を行う。(「順次型」)

KQ2-2：日常会話ができるようになった後も、特別に取り出しをして日本語指導を行いつつ、教科指導も行う。(「並行型」)

KQ2-3：特別に取り出しをして国語、社会科など日本語に依存する教科の補充をしつつ、他教科は所属学級で学習していく。(「補充型」)

ディスカッションを通じて、これらの3つの指導法は、日本語指導と教科指導をいずれも分離した形で行っているという点を把握する。この点はさらに第3回目の授業で考察を深める。

### 6.3 第3回：日本語指導と教科指導の統合を考える

日本語を母語としない子どもたちの教育は、日本語指導を優先させ、その上で教科指導を進めようという考え方に基づいて進められるのが一般的である。すなわち、日本語指導と教科指導が切り離されて行われている。第3回では、以下の3つの命題(KQ3-1、KQ3-2、KQ3-3)を用いて、このような指導法の是非を考える。

◆次のような指導の考え方に賛成か反対か。

KQ3-1：日本語指導を優先させ、その上で教科指導を進める方が学習効果は上がる。

KQ3-2：日本語指導は教科指導とは切り離し、集中的に進める方が効率的で、早く学習に参加できるようになる。

KQ3-3：教科学習に必要な語彙・表現の学習はことばだけ取り出して日本語指導の時間に行うのが効率的である。

これらのディスカッションを通じて、ことばだけを取り出した日本語指導で、本当に子どもたちが学習活動に参加できる力を育成することができるのかを考える。学ぶ力の育成には、教師は様々な支援のあり方を模索しな

ければならない。その1つの手立てとして開発されたのがJSLカリキュラム開発であるが、その有効性は未知で、今後の実践により検証していく必要がある。よって、教える側はその根拠となる事実や論理を十分に検討しておくことが大切である。

#### 6.4 第4回：言語習得に関する前提を見直す

第4回は、言語習得の観点から日本語指導と教科学習の関係を考えることを目的とする。教育現場で言語と教科を切り離れた対応が行われてきた背景には、日本語(言語)習得に関する3つの前提があるのではないかと考えられる。ここでは、以下のこれらの3つの前提(KQ4-1、KQ4-2、KQ4-3)が妥当かどうかを様々な角度から吟味する。

◆次のような考え方についてどう思うか。

- KQ4-1：日本語ができるようになれば学習活動に参加するための力も習得できる。
- KQ4-2：日本の子どもたちと一緒に学習した方が学習活動に参加できる。
- KQ4-3：教科の中でも特に重要な語彙を習得すれば学習活動に参加するための力が育成できる。

もし、このような前提があるのなら、改めて見直していく必要がある。これまでの指導の実践を振り返ると、学習活動に参加するには日本語は不可欠だが、日本語を習得すれば自ずと学習に参加するための力が身に付くのかどうかは疑問である。

また、子どもたちは教材、友だち、教師・指導者との出会いを通して多くのことを学んでいる。よって、日本語を母語とする子どもたちと一緒に学習していくことは確かに重要である。しかし、ただ一緒に学習するだけでは不十分で、学ぶ力を培うには適切な教材や教師・指導者の支えなどが必要だと思われる。

さらに、教科の学習にとって、教科特有の語彙の習得は必要だが、語句や用語の意味を暗記するような文脈から切り離れた単なる辞書理解では学習活動に参加するための力が育つとは限らない。

以上の3つの問題は第二言語習得研究の分野でも明確な結論が出ているわけではなく、重要な研究課題となっている。よって、十分に検討しておくことが授業を実践する上で重要だと考えられる。

#### 6.5 第5回：JSLカリキュラムの特色を理解する

第5回では、JSLカリキュラムの特色を理解することを目標とする。目的、方法、対象、柔軟性、学習項目等がどのようなものかに関する知識を構築する。JSLカリキュラムに関する資料(佐藤・齋藤・高木, 2005; 佐

藤・高木 2005; 佐藤, 2005 等)を適宜配布し、以下のKQ5-1、KQ5-2、KQ-3、KQ5-4、KQ5-5の質問に沿って、カリキュラムの構成や趣旨を学習する。

◆JSLカリキュラムについて調べよう。

- KQ5-1：どのような力の育成をめざしているか。
- KQ5-2：めざす力をどのように育成していくか。
- KQ5-3：どのような子どもを対象とするのか。
- KQ5-4：子どもたちの多様な背景(国籍・滞在日数・日本語力・学習環境、認知発達、学校での学習経験等)にどのように対応しているか。
- KQ5-5：学習項目はどう配列・構成されているか。

JSLカリキュラムでは、「学ぶ力」を育成することが目標であることを理解し、「学ぶ力」とは、「日本語で学校での学習活動に参加する力」を指し、「学習への参加のしかた」「教科内容の知識・技能」「日本語の知識技能」を統合したものであり、学習活動への参加を通じて育成されると考えられていることを把握する。

学ぶ力の育成は、体験を日本語で表現したり、学習の過程やその結果を日本語でまとめたり、学習したことを外に向けて日本語で表現するという活動を通じて行う。よって、「何を学ぶのか」「それをどのような日本語で学ぶのか」が授業づくりの視点となることを理解する。

JSLカリキュラムは、「初期指導」と呼ばれる日本語の基礎的な学習が終わり、日常的な会話がある程度できるようになった子どもたちを想定している。初期指導の後に文型や語彙などを中心にした日本語指導と並行して行い、両者を有機的に組み合わせ、学習活動に参加させるというねらいがあることを理解する。

JSLカリキュラムは、「子どものニーズ→それに合わせたカリキュラム→授業→子どもの学び」というふうに支援者が個々の子どもの状況に応じて開発していくカリキュラムである。一般のカリキュラムでは、はじめに目標設定を行い、学習内容を組み立て、授業の方法を考え、学びを提供するというように、「完成したカリキュラム→授業→こどもの学び」で進められるが、このような流れでは、多様な子どもたちに対応できないからである。この特色を理解する。

JSLカリキュラムは従来型のカリキュラムのように学習項目を固定した順序で配置するものではなく、教師自身が柔軟にカリキュラムを組み立てていく成長型のカリキュラムと言える。日本語を母語としない子どもたちは、その生育背景、学習歴、日本語の力、認知発達などにおいて非常に多様になっており、画一的な内容や定型な日本語のカリキュラムだけでは対応できない。これまで、日本語指導に関する教材が数多く作成されているにもかかわらず、それが共有できないのは、子どもたちの多様性

に対応できないためである。

よって、固定した内容を一定の順序性をもとに配列するのではなく、一人一人の子どもの実態に応じて教師・指導者自らがカリキュラムを作るためのツールという意味合いを持たせている。このため、JSLカリキュラムでは、教師・指導者の日々の実践をサポートするシステムを構想し、指導に役立つようなさまざまな工夫を取り入れていることが特色である。

### 6.6 第6回：ことばと体験の一体化を考える

JSLカリキュラムでは、「ことば」と「内容」を一体化して学習指導することや具体物、直接体験を支えにした学習活動を行うことを推奨している。第6回では、KQ6-1、KQ6-2を手がかりにこれらの学習活動の理由や利点を考えることを目的とする。

◆次の質問に答えよう。

KQ6-1：JSLカリキュラムでは、「ことば」と「内容」を一体化して学習指導することを推奨している。理由を考えよ。

KQ6-2：JSLカリキュラムでは、具体物、直接体験を支えにした学習活動を行う。このような学び方の利点を考えよ。

JSLカリキュラムの基本的な考え方は、「ことば」と「内容」は切り離せないものであり、具体物や活動による支えを受けながら学習に参加することで、内容と日本語の両方の力を高めることをめざしている。「ことば」は「何か」を伝えるための道具であり、その「何か」と「ことば」を共に学ぶことで、ことばの意味と使い方が理解できるといえる考えに基づいている。

教科の学習は、一般的に言えば抽象的、概念的な一般命題の学習が中心である。日本語が十分でない子どもたちにとっては、こうした命題理解よりも、具体物や直接体験から学ぶ方が理解しやすい。命題理解を学習の中心に据えると、どうしても語彙や辞書的なことば理解が先行し、子どもたちの理解を深めるところまで進まないこともあるだろう。特に、学習活動に参加するための力が十分でない子どもたちにとって、新しい課題を理解するには、自分の既存の認識構造にそれを組み入れたり、あるいは子どもたちのもつ既有知識を活性化させたりしていくことが必要である。学習活動に参加するための力を育成する上では、可能な限り具体物や直接体験を通じた学習が重要であり、母語や母文化の支えも必要になる。また、子どもたちを現実の学習場面から切り離し日本語指導という枠組みにとどめるのではなく、学習活動に参加させることがJSLカリキュラムの主要なねらいである。

### 6.7 第7回：AU/AUカードの活用法を学ぶ

JSLカリキュラムは様々なAUで構成されている。AUは「Activity Unit」(活動の単位)の略で、授業を構成する活動の基本単位であると同時に、AUは授業づくりを支援する「ツール」の1つである。第7回では、AUとは何かを把握し、AUカードの活用法を学ぶことを目標とする。JSLカリキュラムに関する資料を見て、以下の3点(KQ7-1、KQ7-2、KQ7-3)を把握する。

◆次の質問に答えよう。

KQ7-1：AU/AUカードとはどのようなものか。

KQ7-2：AU/AUカードはどのように活用するのか考えよ。

KQ7-3：AU/AUカードの例を挙げよ。

AUカードは、「学習活動」と、それに対応した「日本語表現」から成っている。日本語表現は、基本表現とそのバリエーションが示されている。例えば、「比べながら観察する」というAUとともに、よく使うことばとして、「比べる」「違う」「似ている」等の語句、「～と～を比べてみよう」という基本形とそのバリエーションの「～と～はどこが同じでどこが違いますか」等の関連表現が示されている。

子どもたちの日本語の力の中で、特に伸ばしたい表現を決め、それに対応するAUカードをまず選び、そこにある単位的活動が中心となるような学習活動のアウトラインを考え、そして学習活動全体をAUカードによって構成するというのが使い方の手順の一例である。

AUの例としては、「共有経験を確認する」「疑問を抱く原因・理由を追求する」「気づきや疑問を挙げる」「いろいろな視点で考える」「他の視点を探す」「いろいろな位置から見る」「他の人の立場で考える」「他の事物にとってどうか考える」「他の方法を考える」等、佐藤他(2005)には100のAUの例とカードの例が提示されている。指導者はニーズに応じて作成してよい。

### 6.8 第8回：トピック型JSLカリキュラムを理解する

第8回では、「トピック型JSLカリキュラム」(文部科学省, 2003d)について理解することを目標とする。指導目的、特色、活動等の枠組み等を以下のKQ8-1、KQ8-2、KQ8-3を手がかりにして把握する。

◆次の質問に答えよう。

KQ8-1：「トピック型JSLカリキュラム」とは具体的にどのようなものか。

KQ8-2：各教科に共通の学ぶ力/学習活動とはどのようなものか。例を挙げて説明せよ。

KQ8-3：テーマはどのような観点から選ぶとよいか。

テーマの具体的な例を挙げよ。

トピック型 JSL カリキュラムでは、教科を問わず見られる「体験」→「探求」→「発信」という学習活動に日本語で参加するための「学ぶ力」の育成をめざしている。子どもの「学ぶ力」に応じて学習活動を設定できるように様々な日本語表現のバリエーションを用意し、学習活動への参加を促すためである。特定の教科の枠組みにしばられないテーマを設定し、それを学習課題として追究し、そこでの成果を日本語として産出していくことを主眼とする。テーマは子どもたちが所属している学級で学習している内容から設定することもできる。特定のテーマを中心にしてそこから生ずる課題が「トピック」であり、この「トピック」について、具体物や体験、あるいは既有知識を支えにして子どもたちの学習活動が展開する。こうした学習活動へ日本語を用いて参加することが、学ぶ力の育成につながると考えられている。

#### 6.9 第9回：教科志向型 JSL カリキュラムを理解する

第9回では、「教科志向型 JSL カリキュラム」(文部科学省, 2003e) について理解することを目標とする。トピック型と比較しながら、指導目標、特色、活動等の方法等を考える。以下はその手がかりとなる質問である。

##### ◆次の質問に答えよう。

KQ9-1：各教科の学習の基本となる学び方はどのようなものか。算数(数学)科、理科、社会科の学び方の例を挙げよ。

KQ9-2：国語科の学習の基本となる学び方はどのようなものか。国語科の学びはどのように異なるか。

KQ9-3：一人一人の子どもの理解に応じたきめ細かな支援(学習支援、日本語支援)や指導を行う上で考慮する点は何か。

教科志向型 JSL カリキュラムでは、各教科の授業の構造に応じ、各教科の学習活動に日本語で参加するための力(=各教科における「学ぶ力」)の育成をめざしている。各教科には特有の学び方や典型的な授業の流れ等があり、教科の学習のためにはその学び方を具体物や体験を支えにして習得していく必要がある。

算数科は、算数的活動を通して、数量や図形についての知識や技能を身に付け、考える力を高めていくための「学ぶ力」の育成をめざしている。算数科では、「問題を把握する→解決の計画を立てる→計画を実行する→実行した結果を検討する」が基本構造である。

理科は、観察や実験などを行い、科学的な概念等としてとらえ直し、自然の事物・現象についての理解を深め、

科学的な見方や考え方を構築していくための「学ぶ力」の育成をめざしている。理科では、「課題の把握→予想→観察・実験・調査、結果→考察→発表」が基本構造である。

社会科は、体験的・問題解決的な学習活動に参加し、社会的なものの見方や考え方を身に付け、知識や概念を習得していくための「学ぶ力」の育成をめざしている。社会科では、「課題をつかむ(課題把握)→調べる(課題追及)→まとめる(結論付け)」が基本構造である。

いずれも、教科の知識・概念等を習得ではなく、教科に参加するための力の育成をねらいとしている。結果的に教科のものの見方、考え方が育まれるような支援の必要性を理解することが大切である。

国語科は、「言語活動への参加を通して、互いの立場や考えを尊重しながらことばで伝え合う力を高めること」をめざしている。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域と発音・文字・表記・文構造などの「言語事項」を関連づけた言語活動を多様な組み合わせで構成されている。

国語科は、言語(日本語)そのものの能力を育成することを目標としている。よって、算数、理科、社会といった教科が「日本語で教科の内容を学ぶ」のとは、質的に多少異なる。他の教科では日本語が不十分であったとしても、子どもたちはそれまでに身につけたその教科に関する知識や経験を生かして学習に参加することが可能であるが、国語科ではそれが難しい。

教科志向型 JSL カリキュラムで重要なことは、直接体験や既有知識から、教科の知識・概念・考え方の理解に至る段階において、一人一人の子どもの理解に応じたきめ細かな支援(学習支援、日本語支援)や指導を行うことである。この際、性急に指導を進めようとするのではなく、子どもたちの実態に合わせて、最も適した方法を選択し、学習の成果が上がるように努めるようにすることが大切である点を忘れてはならない。

最後に、トピック型と教科志向型 JSL カリキュラムの関わりに触れる。これらは、一方が他方の準備となるような「積み上げ」的な関係はないので、この2つを併行して実施したり、相互乗り入れしたりすることも可能である。

#### 6.10 第10回：授業を構成する

これまでに学習した JSL カリキュラムに関する知識を活用して、第10回では、授業の構成のしかたを学ぶのが目標である。ここでは、次の4つの段階に分けて授業の構成の仕方を導入する。はじめに、対象となる子どもの実態を把握して、トピック・学習内容を決定する(第1段階)。次に、学習目標を決定して主たる活動を決め、授業の構想を立てる(第2段階)。そして、具体的

な支援方法を決定し、教材・教具を準備する(第3段階)。最後に、授業の評価のしかたを決定する(第4段階)。

最初に第1段階の「子どもの実態の把握とトピック・学習内容の決定」について、KQ10-1とKQ10-2を基に考える。

◆次の質問に答えよう。

KQ10-1: 授業内容を決定するために行う実態調査では、どのような項目・内容の情報を収集するか。具体的に挙げよ。

KQ10-2: トピック・学習内容はどのような点に着目して、どのような方法で決定するか。決定に関わる要素を挙げよ。

実態を把握する際には「子どもたちは教室でどのような学習に参加できずにいるのか」「その要因は何か」という視点から情報収集することが大切である。トピック・学習内容の決定は、実態と在籍学級での学習状況から「在籍学級での学習に参加できるようにするには、どのような学習内容取り上げて授業作りをしたらよいか」という視点から選定する。決定の過程では子どもの経歴や学習条件等のレディネスを加味する。

### 6.11 第11回: 学習活動を組み立てる

トピックと学習内容が決まったら、次に第2段階として、学習目標を決定して主たる活動を決め、授業の構想を立てる。第11回では、学習目標の決定と活動展開について何をどのようにするか具体的にイメージする。まず、KQ11-1、KQ11-2を手がかりに考える。

KQ11-1: 学習目標はどのような観点から決定するか。具体的に挙げよ。

KQ11-2: 活動展開を構成する柱となるのは何か。

学習目標の決定は、「どのような学ぶ力を高めるか」「どのような活動にどのような日本語で参加する力を高めるか」等の視点から行う。ここで大切なのは、AUを利用して、具体的な目標/活動を定めることである。

目標設定と同時に活動展開を決定する。活動展開を構成する柱となる基本構造である。例えば、トピック型であれば「体験→探求→発信」である。

主たる活動が決まったら、「基本構造の各段階をどのような活動で組み立てるか」「どんな日本語表現で活動参加をさせるか」を検討する。具体的には、AUを授業の基本構造に組み入れる方法で構成する。つまり、体験的活動、探求的活動、発信的活動のAUを選んで配列する。これは体験(導入)→探求(展開)→発信(まとめ)という1時間の授業の流れとなる。

例えば、「タンポポとコスモスのつくりを比べる」というトピックでは、体験段階では2種類の花を観察したり、分解したりして「知識を確認するAU」を用いる。探求段階では、花に関する「情報を収集するAU」と「得た情報を関連づけるAU」を用いる。発信段階では、花についてわかったことを「絵や図などで表現するAU」から授業を構成する。

次に、具体的な支援方法を決定し、教材・教具を準備する(第3段階)。どんなことばで働きかけるか、表現させる時に必要な補助の方法は何か等をAU単位で具体的に構成する。補助の方法は「写真をみせて視覚的に理解させる」というように具体的な行動レベルで考えることが重要である。

### 6.12 第12回: 評価の方法を考える

第12回では、JSLカリキュラムにおける評価(第4段階)について考えるのが目標である。評価はなぜ必要かという評価の目的と機能という基本的な問題から入り、次にJSLカリキュラムにおいては、何を基準にどう評価するかをKQ12-1、KQ12-2、KQ12-3を手がかりに考える。

◆授業の評価について考えよう。

KQ12-1: 評価はなぜ必要か。評価の目的と機能を考えよ。

KQ12-2: 何を評価するか。評価の対象となる事項を挙げよ。

KQ12-3: どのような基準で評価するか。評価基準となる事項を挙げよ。

評価の目的の1つは学習状況を調べ、目標の達成に向けて学習が順調に進んでいるかを把握することである。また、学習成果を診断するだけでなく、授業の見直しの資料にもなる。学習状況をとらえ、次の学習をデザインするためのも材料としても必要である。

JSLカリキュラムでは、「ことば」を「活動参加のための道具」とらえている。すなわち、日本語を学ぶのではなく「日本語で何かをする」ことを学ぶという考え方である。よって、評価の対象は日本語能力や学習の内容ではなく、「日本語を使って何ができたのか」という視点で、活動内容と日本語を一体化して評価することが妥当である。

評価は学習の目的に沿って行われる。具体的には、「目標とした活動に参加できたか」「どのような言語表現で参加できたか」「日本語で何かできたのか」等が評価され、目標として設定した「学習への参加状況」が評価の基準となる。したがって、評価においては、どのように活動に参加し、どのような表現方法や日本語運用が見られた

ら目標達成かを明確な基準で決めておくことが大切なことを理解する。

## 7. シラバス・授業構想と言語習得研究との関わり

JSL カリキュラムを活用した授業を実践するには、その開発の背景にある学校現場での児童生徒の言語学習の状況等を把握し、なぜこのようなカリキュラムが開発されたのかを理解することが重要である。また、カリキュラムの特色である、「学ぶ力」という新しい概念を具体的にどう捉えるか、また、ことばと体験を一体化して教えるにはどうするか、言語学習と教科学習を統合した授業とはどのようなものか等について、教師が十分に把握しておく必要がある。さらに、第二言語習得研究や認知心理学等の観点から言語の習得過程を考察し、指導法や教室活動の手がかりを得ようとする姿勢も育てようとしている。

一般に JSL カリキュラムの指導法、教授法を扱った研究は、筆者が文献でみる限りは、JSL カリキュラムの内容に沿った具体的な指導法の事例を紹介するものが多く(文部科学省, 2003f; 早瀬・貞松・脊讚, 2012; 兵庫県 JSL カリキュラム実践支援事業連絡協議会, 2009)、その背景や根拠、言語習得、第二言語学習、外国語教授法等との関わりについてあまり触れていない。しかし、このシラバスでは、このような側面から理解や考察を深めることにも重点を置いている。第13回以降の授業シラバスには、JSL カリキュラムを認知能力と言語発達、学習言語と言語習得、外国語教授等に関する理論面から考察・評価する内容を盛り込んである。JSL カリキュラムを実践する上で一番重要なのは、その根幹となる日本語で「学ぶ力」とは何かをしっかりと把握することである。これまでのバイリンガルに関する研究や言語習得研究から得られた知見を援用して考察を深めることも可能である。例えば、日常のコミュニケーションはできるが、学習について行けない JSL の児童生徒の日本語運用の実態をカミンズ理論研究(中島, 2011)に沿って分類すると、会話の流暢度(Conversational Frequency, CF)に関する能力は身につけているが、弁別的言語能力(Discrete Language Skills, DLS)、教科学習言語能力(Academic Language Proficiency, ALP)に関しては、十分とは言えない状態といえる。CFは、「よく慣れている場面で相手と対面して会話する能力(従来の BICS に相当するもの)」、DLSは、「文字の習得とか、基本文型の習得などルール化ができて個別に測定可能な言語技能(CALPの一部)、そして、ALPは、習得に長時間かかる読解力、作文力、発表力、応用力等である。また、カミンズは、「教科学習言語」という概念を定義し「学校という文脈で効果的に機能するために必要な一般的な教科知識とメタ認知ストラテジーを伴った言語知識」としている(中島,

2011)。これらの理論的な枠組みは言語の習得と運用に関して理解を深めるのに役立つと考えられる。

また、学習言語に関しては、バトラー後藤(2011)が実証的な研究に基づく多くの研究を行っている。その中で、語の習得は学習言語の中心に位置すると述べ、その理由は、語を習得するということは、概念を習得することで読解や教科学習の基礎になるからであると述べている。特に教科語彙は日常生活では使われない語を多く含んでいる。そのため、JSL 児童生徒の教科学習を妨げる大きな要因の1つになっている。引地(2009)は1つの語や表現が理解できないために学習が分断され、授業の流れについていけなくなり、自信ややる気をそいでしまうことを指摘している。特に、語彙の習得は、語を何度も見たり聞いたりしたから使えるようになるというものではなく、使ってみて、間違えて、修正してというような試行錯誤を繰り返しながら語彙を精緻化し、獲得へとつながると述べている。成人であれば第二言語の語彙を簿との語彙と結びつけることが可能であるが、認知発達の過程にある児童生徒では、それが難しく、語の概念の形成が容易ではない。Butler & Hakuta (2006)は、語を認知する力や未知語を文脈から推測する力やことばを定義する力が母語話者と第二言語学習者の学力差を生じさせつゝ一要因になっていることを実証している。

これらの語彙習得の研究に関する知識は教師が授業を構成していく上で、多くの示唆を与えるものである。これ以外にも、言語学習・習得研究から得られる知見は多くあり、日本語教授法に関する授業に取り入れる価値は高いと考えている。また、JSL カリキュラムを現場で活用する支援者が、対象となる学習者の実態に合わせてカリキュラムを応用し、授業をさらに精緻化していくためには、実践を通じて得られた知見を理論的裏付けとともに構築していく必要があると考えられる。

## 8. 今後の課題

文部科学省(2013)の「日本語指導が必要な児童生徒に対する指導の在り方について(審議のまとめ)」によると、学校において、日本語指導が「特別的教育課程」として実施される運びとなった。よって、これらの児童生徒の日本語指導や教科指導に携わる教員や支援者はますます増加するであろう。今後は本稿で提示したシラバス試案に基づいた授業を実践し、整備・充実・改訂していきたいと考えている。また、日本語教育中級者向けのシラバス(続編)の試作も検討中である。本稿をお読みになられた方々より、ご意見等をいただければ幸いである。

## 注

<sup>1</sup> 紙面の制約上、第12回までの内容を扱う。



## 謝辞

本稿をまとめるにあたっては、3名の査読者の方々より有益なご助言、御指導を多く賜りました。筆者の力不足から十分には生かせませんでした。この場をかりて厚く御礼申し上げます。

## 参考文献・資料

- 佐藤郡衛・齋藤ひろみ・高木光太郎 (2005). 『小学校 JSL カリキュラム「解説」』スリーエーネットワーク.
- 佐藤郡衛 (2005). 『小学校 JSL「国語科」の授業作り』スリーエーネットワーク.
- 齋藤ひろみ・高木光太郎 (2005). 『小学校 JSL カリキュラム「解説」』スリーエーネットワーク.
- 中島和子 (2011). 「カミズ教育理論と日本の年少者言語教育」『言語マイノリティーを教える教育』ジム・カミズ著・中島和子訳著, 慶應義塾大学出版会, 13-59.
- 早瀬郁子・貞松明子・脊讚尚子 (2012). 「散在地域における JSL 児童生徒支援の現状と課題－こども日本語サポーター養成講座－の取り組みから－」佐賀大学留学生センター紀要第 11 号, 37-54.
- バトラー後藤裕子 (2011). 『学習言語とは何か－教科学習に必要な言語能力』三省堂.
- 引地麻里 (2009). 「語彙力をどのように育てるか－ JSL の子どもの成長を支える語彙教育を目指して」『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシー－主体性の年少者日本語教育学』川上郁雄編著, 明石書店, 194-217.
- 兵庫県 JSL カリキュラム実践支援事業連絡協議会 (2009). 「JSL カリキュラム実践事例集」平成 21 年 3 月.
- 文部科学省 (2003a). 「学校教育における JSL カリキュラムの開発について」(最終報告) 小学校編 (平成 15 年 7 月). [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/001/008.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008.htm).
- 文部科学省 (2003b). 「JSL カリキュラム (小学校編) 概要」(平成 15 年 7 月). [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2010/08/09/1295608\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/08/09/1295608_1.pdf).
- 文部科学省 (2003c). 「JSL カリキュラムの開発の基本構想」(最終報告) 小学校編 (平成 15 年 7 月). [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/001/008/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/001.htm).
- 文部科学省 (2003d). 「トピック型 JSL カリキュラム」(平成 15 年 7 月). [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/001/008/002.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/002.htm).
- 文部科学省 (2003e). 「教科志向型 JSL カリキュラム」(平成 15 年 7 月). [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/001/008/006.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/006.htm).
- 文部科学省 (2003f). 授業例 (指導案)「授業例」 「JSL カリキュラムの開発の基本構想」(最終報告資料 3) 小学校編 (平成 15 年 7 月). [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/001/008/005.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/005.htm).
- 文部科学省 (2005). 「学校教育における JSL カリキュラムの開発について」(最終報告) 中学校編 (平成 17 年 3 月). [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/001/011.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/011.htm).
- 文部科学省 (2007a). 「中学校における教科志向型 JSL カリキュラム (中学校編; 国語科, 社会科, 数学科, 理科, 英語科)」(平成 19 年 3 月) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/003/001/011.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/011.htm).
- 文部科学省 (2007b). 「JSL カリキュラム (中学校編) 概要」(平成 19 年 3 月). [http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2010/08/09/1295608\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/08/09/1295608_2.pdf).
- 文部科学省 (2012). 「日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する今後の検討の方向性等について」日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議 (第 1 回) 資料 3, (平成 24 年 4 月 24 日). 文部科学省初等中等教育局国際教育課. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/kaigi/1320507.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/kaigi/1320507.htm).
- 文部科学省 (2013). 日本語指導が必要な児童生徒に対する指導の在り方について (審議のまとめ) (平成 25 年 5 月 31 日). [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/05/\\_icsFiles/afieldfile/2013/07/02/1335783\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/05/_icsFiles/afieldfile/2013/07/02/1335783_1_1.pdf).
- Butler, Y. & Hakuta (2006). Cognitive factors in children's L1 and L2 reading, *Academic Exchange Quarterly*, 10(1), 23-27.

【連絡先 稲葉 みどり

E-mail:mdinaba@aeu.ac.jp

# Designing an Introductory Course for JSL Teacher Development: Teaching Japanese to Children Crossing Borders

Midori INABA

*Faculty of Education, Aichi University of Education*

## Abstract

The purpose of this study is to design an introductory course for JSL teacher development. The course plans to provide a basic knowledge about education for JSL children at school in Japan. It pays special attention to creating a class based on “JSL Curriculum” developed by the MEXT (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology). This study first overviews the educational background and characteristics of the JSL curriculum, and then presents the trial syllabus for the course.

The objective of JSL curriculum is to nurture language competency for participating in leaning activities in schools. It integrates second language education (Japanese language) and subject content education (such as math, science and so on). It is a new and different type of curriculum which consists of various AUs (Activity Units). AU is a kind of linguistic tool to provide the teachers ideas how they combine the language skills and subject education in teaching.

In order to teach JSL children at school, teachers are expected to grasp the difficulties that JSL children (students) encounter. The central issue here is that even children have the language skill necessary for day to day living, including conversations with friends and informal interactions. But they do not always have the language skill necessary to understand and discuss content in the classroom. The former is called BICS (Basic Interpersonal Communication Skills), and the latter, CALP (Cognitive Academic Language Proficiency). JSL curriculum has been developed to solve this problem. It has dual focus on subject content (mathematics) and language (Japanese) education.

In order to practice JSL curriculum, teachers need to understand the basic ideas and characteristics of it. They also need to learn how to create classes and how to practice teaching. The author devised the trial course syllabus for undergraduate students including novice JSL teacher (pre- and in- service) trainees to build the basic knowledge essential for the practice.

The trial syllabus consists of four basic parts. The first part introduces educational background of JSL curriculum development by MEXT. It reviews the methods of JSL supplemental teaching such as “Toridashi”, “Hairikomi”, and “Tukyu”. The main agendum is to discuss merits and demerits of teaching Japanese language and subjects separately. The second part focuses on the comprehension of JSL curriculum, fundamental ideas, underlying principles, and AU (Activity Unit). It also pays attention to the significance and necessity of integrating language skills and subject education. The third part explores how to practice JSL curriculum in school. The design of the class, teaching plans, classroom activities, and evaluation are discussed and created. The final part assesses JSL curriculum from the theoretical perspective such as cognitive development, first and second language acquisition, approaches and methods in foreign language teaching. Since this syllabus is only one of the examples for novice teachers, development of the variation or more advanced one is necessary.

## Keywords

Japanese language education, teacher development, JSL curriculum, AU (Activity Unit), CALP